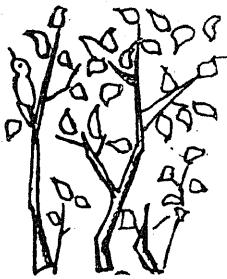


小鳥を飼う楽しみ

—2—

高 島 春 雄



陽気な鳥でいつも群を成して潤葉樹の林の中を飛び廻ります。昆蟲の卵、クモ、植物の葉に寄生するダニ等微細な動物性の物を啄み、そのほかピワ、茶、ツバキの花の蜜を吸い、ピワ、カキ、アケビ、ウメモドキ等の実を食べるのが好きです。その舌を見ると両縁が多少筒のような形に内がわに曲りこんでいますから、蜜など液体を吸収するのに便利だし舌の先が分裂しているので小さい蟲を拾うようにして啄むに役立ちます。

鳴声はツウーッウーで、雄が物に驚く時はキリキリキリキリと鳴きます。蜜を吸つたり木の実を食べる時、互に鳴き合い集つて来る性質があるので昔から団おどりを置いてその声につられて来たのをもぢやはござで

捕る事が行われました。

メジロはウグイスと並んで日本での飼鳥の両大関といえましょ
う。スズメより少し小さく、その名の通り眼のふちに白の限取りがあり、羽はウグイスよりも明るい緑色で、下面は喉の所が黄色でそれ以下は濃褐色になり、その中央部は黄色です。

ウグイスのほうはよく特別製の桐の箱の中に收まり、立派な座敷の床の間に置かれたりして貴族的であるのに、メジロはあり合せの鳥籠に收まつて農家の軒先にも床屋の店頭にもぶら下り大衆的な感じがします。メジロは明るい所が好きで、又木の枝に何羽かとまる時隙間なく密接し、もしその中一羽が飛び立つたりすると、すかさず両方から詰めてその空席をなくします。これは籠の中に何羽か一緒に飼つた時にも見られることで「目白押し」と昔からいわれます。雄と雌、雌同志の時など一層盛に行われます。



メジロは丈夫で餌につかせることもた易いのが特徴で、水浴びを好みますから水を絶やさぬようになります。秋ならカキ、蒸したサツマイモ、黄粉の練つたもの等を餌にすればよいのですが、長く餌い続けるためには擂なぐ銅(三分五厘位)を用いねばなりません。

ヤマガラ

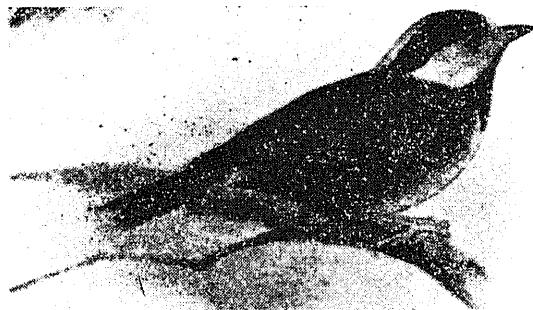
ヤマガラはシジュウカラに似て大きく、体は主に栗色で、頭の一部は黒く顔は広く栗色がかかつた白色、翼と尾は石板色です。

人に馴れ易いので訓練して芸を仕込むことが出来る。いわゆるヤマガラの曲芸です。今でも神社の祭礼或は賑かな街頭でそういうやマガラに芸当をさせ、ささやかなたつきにしている人があります。そのように訓練することは皆さんには時間的余裕のないことはよく判つていますが、しかしどのようにして仕込むかを一応記して御参考に供しましよう。

人間も芸能方面のことは子供の頃からでないと無理が多いのです。ヤマガラも仕込むのは離の頃からでないといけません。巣立ちする数日前のを捕えて来て籠に入れて、その籠を飼主のそばに一日中置いて人がすぐそばにいても驚かぬよう人が籠に手をかけてもびっくりしないようにしつけるのが第一歩です。次には飼主の手から直接餌を食べるようになりますがこれが中々難しい。餌はアサの実などですが、籠の中をきれいに掃除して一粒もそれが残らぬようにして、中にいるヤマガラが腹のへつた頃を見計つてアサの実を割り、中みだけを指先にのせてそつと籠の中に挿し入れます。はじめは恐れてその指先の側には来ませんが、腹がへつてどうにもやりきれないでの遂には指先のアサの実に口をつけるようになります。この癖をつけてから今度は籠の蓋を開き、指先を籠から段々離すとヤマガラの餌につられて籠の外に誘い出されて来ます。念の為ヤマガラの翼の片方だけ、或は両方共一枚おきに羽をつみきつて置くから遠くには逃げられないし、部屋の障子もしめきつて置きます。あ

とではどんな所でも逃げ出せなくなりますがこうして一年位かかつて水汲み、宙返り、鐘つき、おみくじ引き、御幣担ぎ等を覚えます。

ヤマガラは教えなくても自身でそり身になつて宙返りをする癖があるので、宙返りをする高さよりも三センチ位も高い所に一本の綱を張つておくと、それが邪魔にならぬよう宙返りをします。四五日たつたらもつと高くするという風にすれば、遂には一メートル半も飛び立つて宙返りをするのです。鐘つきは、籠から出て来たヤマガラがチヨンチヨンと歩いて造り物の鐘つき堂の階段を上り、鐘に結んだ紐を嘴にくわえてならすのだし、おみくじ引きはやはり造り物の神社の拝殿の前まで進み、賽錢箱のような物の中からどれか一枚おみくじを嘴で引き出しそれをくわえて戻つて来る。それを飼主がお金を出した人に渡すという仕組みです。小鳥を仕込んでこのようないいをさせるのは外国もありますが、ヤマガラを使うのは日本人だけだといわれま



やまがら

て来る。それを飼主がお金を出した人に渡すという仕組みです。小鳥を仕込んでこのようないいをさせるのは外国にもあります。ヤマガラを使うのは日本人だけだといわれま

す。尤もどのヤマガラでも必ず仕込めるわけではなく、不器用なものもあつてそういうのでは駄目です。

ヤマガラは秋には人里近くに現れてツツビン、ツツビン又はチチベイ、チベイと鳴きます。

夏は昆蟲やその幼蟲を食べ森林害蟲の駆除に役立つ有益鳥です。冬はエコノキ・シキミその他木の実を盛に食べる所以、広い庭があればこういう木を植えることによつてヤマガラを誘致できます。巣箱を架けるとはいることがあるので、そういう住宅を彼等に提供して繁殖させたいものです。但し今までの例では、巣箱はシジュウカラで占領されることが多い、ヤマガラを誘うのに余り役に立たないホオジロ



家の庭に巣箱を設けると、シジュウカラにも利用して貰えないでスズメが占領することが多いのは困りものです。スズメにはわざわざ住宅を提供するにも及ばぬことです。私はヤマガラを飼つたことはありませんが、その道の人たの話では、ヤマガラはヒバリと同じよう背の高い籠で飼う。もし天井に近く環を吊し

ておくとその環を潜つて宙返りをするのが見ものです。六分位の擂餅のほかにアサの実とか小蟲を度々与え、それに水浴びを好みますから前に記したような方法で水浴をさせねばならないのです。暑さ寒さに余り強くないので、夏は心がけて出来るだけ涼しい所に置き冬は寒風にさらさぬ思いやりがほしいといわれます。メジロなどに比べれば銅いにくい鳥でしょう。

ホオジロ

これはスズメ科の鳥で畑でも雑木林でも原野でもよく見かけます。木のてつべんにとまつてお山の大将我独りといつた顔で鳴りますが、それは「一筆啓上仕」というよう聞えます。

背面は大体栗赤色で背の羽には黒の軸斑があり、顔は白と黒の糸が交互になつてホオジロの名の起りになりました。

南原繁氏が東大総長をなさつていた時、日本に来た米国のあるべき御方に記念として日本画の懸軸を一幅進呈されることになりました。國柄は夏蜜柑のなつている枝に一羽の鳥がとまつているもので画家の名は今想い出せません。これを贈呈するときつと鳥の名を訊かれるに遜いないからはつきりさせて欲しいという総長の御希望で、東大の先生の一人がそれを持つて私の所にやつて来られました。それがこのオオジロだつたのは面白いことでした。

雄は春から夏にかけて樹木の頂に陣取り、危険でも迫らぬ限りかなり長く鳴き続けています。秋から冬にかけては頂でなく低い所に移つて鳴きます。その鳴声は「一筆啓上仕候」のほかに「ちつべ死んで四十九日」とか「稚づけいつづけて」「源平つじ白つじ」などの反訳があります。チチロ・チロチロ・チチチロチとい

う声が人により様々に耳にはいるわけです。小鳥ではないが今は東京にも沢く棲息するようになつた支那原産の小綏鶏(コジュケイ)も東京ではその鳴声から「ちよつと來い」の通称を得たくらいで、人によつてはワンツースリーとも people when とも聞えるといいます。ピヨーウィ、ピヨーウィと緻高い声で繰返し鳴くのを皆さんもおききになつたことがあるでしよう。

ホオジロの巣は四一五月頃茅原や雜木林の中で見つけることがあります。人の背だけ位の高さの所に細い枝で編んだ碗状のものであります。

飼うには播餌、擂餌の何れでもよく、飼い易い鳥であります。

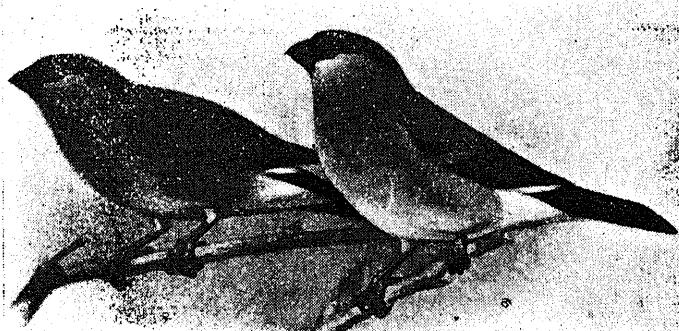
ウソ

ウソという鳥が本当にあるのです。渡り鳥で日本には冬に群になつてやつて来ます。スズメ科のものでスズメより大きく、嘴の太く短いのが特徴でその色は黒く、雄では頭は黒く頬から喉にかけて紅色で背面と喉以下の腹面は青色です。雌は喉の所が紅くなく灰色です。羽の色に色變りがあつてそれを昔からアカウソ、テリウソなどといつて珍重したものです。

細く静かで高尙でヒーヒー又はヒーホーと聞えるので古来その声を愛されます。果樹の蕾を食べ又サクラウメ・ツツジ等の蕾や花も食べます。自然状態では夏は日本にはいないのですが、飼育で飼えば巣引もします。アサの実・ヒエ等の播餌でも擂餌でもいいといわれています。

筑前太宰府の天満宮にうそ替という名高い行事があります。それを序に御紹介しましょ。鳥に関する土俗玩具は数多くありますが

ウソのもあつて多くは木彫です。長さ八一九センチ、径四センチ位のが多いといいます。太宰府の天満宮は勿論菅原道眞を祀つた社で伝説によるとその普請の時たくさんの蟲が出て来て木材を食い荒し職人の仕事を妨げるので困つていたところ、どこからともなくウソが現われてそれらの蟲を片つ端から啄み食べててくれた。それによつてウソが天満宮や菅公と縁の深い動物になつたのだといいます。ある一地方に害蟲が大発生して害を逞しくしている時、その天敵となる鳥がどこからか多数飛来してこれらに大打撃を与えることは西洋にも東洋にもいろいろ実例があること故全くの作り話とも思われません。さてこのウソ替ですが、本家の太宰府天満宮で行われるのは毎年一月七日の酉の刻(午後七時頃から九時半頃まで)で、この時には九州各地はもとより四国や中国地方からも参詣者が集つて数千人に達するそうです。参詣者はめいめ



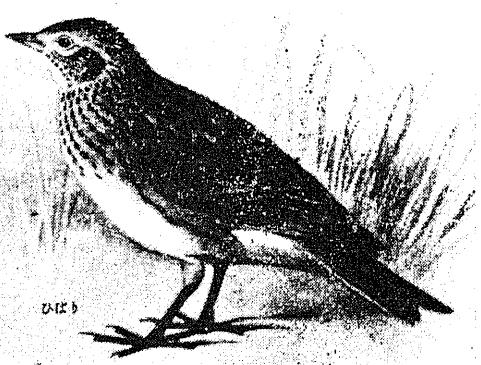
い木彫或は板(木片)のウソを袖にかくしてウソ替の始まる合図を待つてゐると、刻限が来てあたりの電燈は一斉に消され、薄闇の中人々は「カイマショウ(替えましよう)の訛」を口々に繰返し呼びながら、すれ違う人の誰かとウソを交換するのです。そうしているうちに神社の神職十二人が参詣人に変装して三十分置き位に金のウソを一つ宛持つて群衆に紛れ込みこれはと思う人(つまり眞に神信心に篤いらしい人)を見つけてその人のと金のウソとを取替えるのです。その時神職は今のが金のウソだと知らせ、その人を社務所に案内して神酒を酌んで帰すのです。金のウソを受けた人々は非常な幸運が来るものと伝えられ、そういう十二人の幸運者は人々に羨まれるわけです。しかしこの幸運者の中にはいるのは容易なことでなく一般の人は自分のよりも大きき立派なウソが手にはいれば、それを幸運にしているようです。金ウソは長さ二センチ、径一センチ位の小さいもので少くとも金メックはしてあり美麗なものだといわれます。

ヒバリ

ヒバリは日本のも歐洲のラークも一つ種類ですがそれぞれの地方で大きさや羽色に多少の差異がないのではありません。

羽色は皆さん御存じの通りですが枯草の色に似ているのでその姿を見つけにくい。いわゆる保護色として役立つことでしょう。雄と雌とは同色で雌のほうが僅かに小さいのです。後趾の爪はかなり長くて後趾の長さを凌いでいます。

日本では最も普通の鳥の一つでその習性もよく知られています。木には決してとまらないで原野や耕地の地上を歩きつゝ餌を求めま



ひばり

は麦畑によく造られた麦の株に近づけてよく隠れるようにしてあります。尤も巣は草の根や禾本科植物の枯葉などで作つた意外に粗末なものです。ここに三一四箇の卵を産むか卵を抱くのは雌だけです。親鳥が飛び立つたり舞いおりたりした所が巣のありかないことはよく知られています。

食べる物は草の実が主で夏は多量に昆蟲を捕え雛の食物も主にこれです。冬には草の実ばかりでなく耕地に来て雑穀の落穂を拾つた

す。春になつて菜の花の開く頃、いわゆる揚げ雲雀で雄はビーチクビー・チク美しく嬌かな声を空一杯にまき散らしつゝ舞い上つて行きます。「見よや揚がる雲雀」と唱歌にある通りです。その特色ある声は色々人語に写されていますが、昇る時が「日一分(ヒイチブ)」、降る時が「月イチブ」、降る時が「月ニ朱(ツキニシユウ)」などは面白いし「利に利や食う、利に食う、利に食う…は後や流すう」というのもあります。巣

ります。落穂であるから穀類への害はまず問題にならぬ程度で従つてヒバリは私達にとり有益鳥であるし、春先の美しい鳴りは私達の心をのどかにし春色を更にこまやかにしてくれるので人生の好伴侶としての役割も見逃してならぬと思います。ヒバリのように鳴く音の長く続く小鳥というのは他に例を見ないようです。

ヒバリを飼うことはた易いが巣引させるのは極めて困難のよう

です。飼うのは禽舎でもいいし鳥籠でもいいのです。但しその籠は昔から雲雀籠といい高さ一米に近い細長いものを使います。この籠の中で飛びながら鳴るのがいいとされます。更に特殊の技術を要するのに「揚げ雲雀」があります。雛の時代からよくなづけたのを籠に銅つておき、時々野原に持つて行つて籠から出す。ヒバリは雲井はるかに飛び上り盛に騒り舞うが、終つて地上に降りた時は籠に戻つて来ます。地方によつてはヒバリの愛好者仲間の集りがあつて鳴合せ会、揚げ雲雀会などコンクールが行われます。それは晴れた無風優勝者となるわけです。

餌は播餌と青菜でよく、夏には蟲を多く与えるようにし或はその代用として三一四分の弱い摺餌でよいようです。それから砂浴が好きなので、そのできるように底に砂を敷いてやらねばいけません。

ん。

ヤマガラが四百円から五百円といつた具合です。これらの小鳥もいつも丈夫とはいきません。食物に中毒したり冷えこんだりすると糞がいつもと變つて来るし、羽にハジラミ（俗にハムシという）などの寄生蟲がついても弱つて来ます。ハジラミの予防としては時々籠を沸騰して湯の中に入れたり、そのあとでDDTを撒くようにしたら宜しいでしょう。

カナリヤ、十姊妹、文鳥、セキセイインコ等のことは既に皆さんよく御承知でしようから略きます。

—財團法人山階鳥類研究所主事—

お わ び

三月号に掲載いたしました、高島先生の『小鳥を飼う楽しみ』(1)の中に挿入した写真のウグイスは、メジロであります。本四月号に挿入したメジロの写真は、ウ

グイスであります。

右の誤りの為、筆者並びに読者に御迷惑をおかけした事を深くお詫びいたします。なお、挿入写真は林野庁編集兼発行「飼鳥掛図」に依ります。